

## 美術界のメディエーター

### ～アートボランティアの解題～

横浜トリエンナーレ学校ということなので、横浜トリエンナーレで既にボランティアの活動やサポーターの活動をされている方もいらっしゃると思います。

『横浜アートボランティアスタイル』を読ませてもらいましたが、これだけしっかりサポーターの活動をされている方々に向かって今更何をか言わんやですが、復習のつもりでボランティア活動を整理してみたいと思います。

#### 【ボランティアとは】

みなさん、サポーターというタイトルを使っていますが、今日はアートボランティアを中心にお話しします。

日本語でボランティアと言うと、「無償の奉仕活動」とか「社会貢献」というイメージが非常に強いんですね。ですが、英語でボランティアと言った場合には、まず「志願兵」。戦争で自分が志願して戦う志願兵とか志願者、自発的に申し出る人、進んでことにあたる人などがあります。英語の場合には、無償の奉仕活動、社会貢献というよりは、何か自発的に事を行う人というニュアンスが強いです。

#### 【ボランティアの活動】

日本でのボランティア活動について整理してみたいと思います。

ボランティア活動は 1990 年くらいからだんだん社会の中に浸透してきました。そのきっかけの一つは、富士ゼロックスが Social Service Leave として、社会貢献活動をする場合には有給休暇として認めることを始めたことです。このことから大企業を中心にボランティア休暇、もしくは社会貢献休暇というのが始まりました。90 年代初めはまだバブル期でもあり、精神的にも物理的にも会社には余裕があった時期で、一気に社会貢献のためのお休みをとることが広まり、メディアにも取り上げられました。

ボランティアが、違う形で大きく注目されたのは 1995 年の阪神淡路大震災です。阪神淡路大震災には、多数の災害ボランティアが神戸に駆けつけました。自然災害でこれほど大きな震災が起きたというのはこの何年か無かったので、日本

中が神戸に向かって何か救済が出来ないかという大きな動きがでたんですね。その前にも人々を救済するような社会貢献的なボランティア活動はありましたので、既に1995年以前から活動なさっていた方にとっては、1995年がボランティア元年ではないという考え方もあるようですが、一応メディアでは1995年を日本でのボランティア元年と位置づけました。

その後、油で真っ黒になった鳥が海岸に引き上げられている写真を見た事がある方もいるでしょう。1997年に日本海にロシアのナホトカ号が座礁して、原油が流出してしまい、日本海沿岸の自然形態が汚染されてしまった事故がありました。油まみれになった鳥を洗う作業も含めて、日本海沿岸にボランティアが集まりました。

阪神淡路大震災と原油流出事故の二つに関しては、災害に対してどうやって様々な人たちが救済の手を差し向ける事ができるかという、災害中心のものでした。

1998年には、ボランティア活動が災害を中心に注目されるようになったので、政府が「特定非営利活動促進法（NPO法）」を施行しました。特定非営利活動促進法（NPO法）というのは、「特定非営利活動を行う非営利団体に特定非営利活動法人としての法人格を付与する事等により、ボランティア活動をはじめとする、市民が行う自由な社会貢献活動としての特定非営利活動の健全な発展を促進し、以て、公益の増進に寄与する事を目的としている」。ちょっとまどろっこしい言い方なんですけど、社会の公益性の高いボランティア活動を行う団体に、政府として優遇措置を行うものですね。この特定非営利活動促進法ができたことによって、随分多くのNPO法人ができましたが、実際にきちんと運営することは容易ではありません。それから、認可されたところも非常に少ないんですが、こういうものが社会の中にできたことによって、さらに弾みがついたと言えると思います。

特定非営利活動の中に、「不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与する事を目的とするものをいう」とありますが、これは17項目あります。

どういう特定非営利活動があるか挙げてみます。

- 1：保険、医療または福祉の増進を図る活動
- 2：社会教育の推進を図る活動
- 3：まちづくりの推進を図る活動

- 4 : 学術、文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
  - 5 : 環境保全を図る活動
  - 6 : 災害救援活動
  - 7 : 地域安全活動
  - 8 : 人権の擁護、または平和の推進を図る活動
  - 9 : 国際協力の活動
  - 10 : 男女共用参画社会の形成の促進を図る活動
  - 11 : 子供の健全、育成を図る活動
  - 12 : 情報化社会の発展を図る活動
  - 13 : 科学技術の振興を図る活動
  - 14 : 経済活動の活性化を図る活動
  - 15 : 職業能力の開発、または雇用機会の拡充を支援する活動
  - 16 : 消費者の保護を図る活動
  - 17 : 全各項に掲げる活動を行う団体の運営、またはそれに関する連絡、助言または援助の活動
- となっています。

結局アートの分野に属するのは、「学術、文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動」ですね。あとは、アートとまちづくりをつなげた場合には「まちづくりの推進を図る活動」「環境保全を図る活動」にも該当すると思います。様々な面でアートとつなげる事はできるんですけど、芸術に関しての言及がなされているのはこれだけです。

2000年にアートボランティアが大きく注目されたのは何と言っても第一回越後妻有トリエンナーレで、ボランティアの「こへび隊」が活躍したことです。越後妻有トリエンナーレは、新潟県の米どころの山間の町で行われたので、今までの国際展もしくは美術館での展示とは全く異なり、自然の中に作品を設置する、もしくは廃屋になってしまった学校や古い家の中を改装しつつ、清掃しつつ作品を設置するという事で、相当な人手が必要でした。そこに、全国から若い学生を中心に多くの人が集まりました。ここで一気にアートボランティアが社会的にも注目されるようになりました。

2001年に、横浜トリエンナーレが第一回目を迎え、資料によると、700人位のボランティアの方が参加したと記録されています。その後、2回目、3回目と1000人を超えるような方々が横浜トリエンナーレにサポーター、ボランティアとして参加されているわけですから、今や大きな国際展に関してはボランティア無くしては運営出来ないという状況が日本の国際展の大きな特徴だと思います。

2002年、私が当時いた水戸芸術館で、まち中を使った「カフェ・イン・水戸」という展覧会を実施しました。これは国際的な横浜トリエンナーレや、越後妻有トリエンナーレに比べれば非常にささやかな、水戸芸術館を中心にした活動だったんですが、ここでもボランティアを募集しました。私としては、茨城県の水戸市で、夏休みの8~10月辺りに実施したものですから、地元の大学や筑波大学の学生さんが来ればと思って募集をかけました。当時、「デ・メーテル」という展覧会が北海道で行われていたんですけど、北海道からも人が来たり、こへび隊の経験者もボランティアとして参加してくれました。まち中でやるので畑の中でやるよりはずっといろんな意味で条件的には楽だったと思うんですが、こへび隊でアーティストと一緒にいろいろな経験を積んだということが、厳しくも充実した時間をもつ事が出来たということで、カフェ・イン・水戸でも参加してもらいました。

カフェ・イン・水戸が横浜トリエンナーレや越後妻有トリエンナーレと全然違うのは美術館が中心だということです。水戸芸術館の美術部門は現代美術のアートセンターとして、常に生きているアーティストと仕事をしてきました。生きたアーティストと一緒に行動するということは、空間に合わせて、もしくはその場所に合わせて作品を設置してもらおうということで、滞在してもらおうこともあるわけです。一回目のカフェ・イン・水戸で募集したボランティアのメニューは5つありました。一つは巨大バツタ設営スタッフ。巨大バツタというのは、2001年の横浜トリエンナーレでインターコンチネンタルホテルの外壁を飾った、室井さんと椿さんの作った非常に大きなバツタです。そのバツタを、カフェ・イン・水戸で、水戸芸術館の広場に設置してもらおうとお二人に話をしたところ、「地上に設置するなら楽だ。」と喜んで参加してボランティアに対し設置の指導をしてくれたわけです。バツタチームの他に、石鹸スライススタッフ、りさ・バルーンスタッフ、映画上映スタッフ、広報活動のスタッフの5チ

ームを募集しました。

#### 【水戸芸術館現代美術センターのボランティア事例】

水戸芸術館は、横浜美術館より4ヶ月くらい遅く1990年にスタートしましたが、ボランティア活動は1992年から始めました。その当時は、美術教育ボランティアというタイトルで研修をして、ボランティア通信の発行や主にギャラリートークをしました。現代美術の新しい作品は、展覧会が始まる直前まで空間に合わせて設置をしてもらうので、どうしても作品になるのか事前に分からないんですね。それから、“現代美術”に、一般の方々が親近感をなかなか持ってくれないので、学芸員が話すのとは違って、もっと噛み砕いた分かりやすい言葉で伝える仲介者として、美術教育ボランティアを始動させました。水戸芸術館の住所が1-6-8だったので、現代美術の始めの一步の「168（イロハ）」と合わせた名前の会報誌もボランティアが発行しました。これは、分かりやすく展覧会や学芸員の仕事などを説明してくれています。その後、1993年に1年間の研修を経て、ギャラリートークを開始しました。当時、水戸芸術館のボランティアとして参加してくれた方々の中には、今や美術館の学芸員をはじめ美術界で活躍している方が何人もいます。公立美術館で恒常的にボランティアをお願いするというのは、多分'93年の時点ではそんなに多くなかったので、東京から離れているにも関わらず、東京から通って下さるボランティアの方も含めまして、非常に質の高い方々が集まってくれました。

1994年には、まだコンピュータが普及していない時期でしたが、ボランティアの中にコンピュータのソフトを開発している人がいて、自主的に現代美術センターのホームページを立ち上げました。

1995年には、水戸芸術館現代美術ファンクラブというのができました。これもボランティアの方が中心になって、Web上でみんながチャットできるようなものを立ち上げてくれました。そのファンクラブの管理もボランティアの方たちがやってくれました。また、私が担当して「ミュージアム・エデュケーションの理念と実践：ニューヨーク近代美術館に学ぶ」という研修会を実施しました。これは、話者が一方的に作品の説明をするのではなくて、来た方たちが自由に作品について話すことによって作品への理解を深めるという、インタラクティブなギャラリートークを、ニューヨーク近代美術館（以下 MoMA）が開発し、その方法論を学ぶものでした。「ビジュアル・シンキング・カリキュラム」もしく

は「ビジュアル・シンキング・メソッド」は、自分が作品から見たものを言葉にすることによって作品への理解を深めるという方法です。この鑑賞方法論は、日本の美術館の中でもかなり浸透してきています。水戸美術館のボランティアもこのメソッドを学ぶ機会を得ました。ある程度美術作品の情報を出すということと、思ったことを素直に言葉にすることとを合体させるような形で、キャッチボールできるトークを目指し、その後、水戸美術館の特徴ともなっていきました。このように、水戸美術館のボランティアの方たちは、ホームページを立ち上げたり、会報誌を作ったり、メーリングリストでファンクラブを立ち上げたり、ギャラリートークを毎週末実施したり、非常に質の高い活動をしてくれたんですが、一方でそれは非常に熱い人たちが集まっていたという事でもありました。その後、ボランティアの中では、すごく熱い人と、それほどでもない人というのが、上手くコミュニケーションがとれなくなる事態がおきました。それで、1997年に一旦全てを解散しました。このときは、美術教育ボランティアの美術教育というタイトルそのものも今の時代には合わないのではないか、ということから、1998年に現代美術センターボランティアと名称を変えて再出発して現在に至っています。

現代美術センターボランティアについて少し整理をしていきたいと思います。水戸美術館では、一年間を通したボランティアと、プロジェクトごとの単発のボランティアと分けています。年間を通したボランティアというのは、2004年当時は次の3つでした。

- 1) CAC (Contemporary Art Center) ギャラリートーカー
- 2) 司書ボランティア
- 3) 現代美術センターファンクラブの運営

今続いているのは、1番だけです。ギャラリートーカーは、一般の方々の前でお話をするので、研修をきちんとしています。そして、来館者の方がリラックスして自分の言葉で話しだす事が出来るようにするため、聞き上手、まず人の話を聞いて、自分が一方的に喋らないことも訓練したりしました。それから、現代美術の展覧会に関しては、事前の勉強会をしつつ、展覧会がオープンしてからもう一度フォローアップし、年度の最後にはレポートを出してもらうような事もしました。水戸美術館のボランティアには、20代から定年退職をした70代くらいまで年齢層も広がったんですが、ボランティアの方たちが本来の仕事

以外に時間を割いて楽しみながら真剣に活動してくれることに、随分頭が下がる思いをしました。

#### 【水戸芸術館プロジェクト・ボランティア】

一年継続してもらうのは、本来の仕事もあったり主婦だったり学校の先生だったりするわけですから、ボランティアの方たちにとっても負担は大きいわけです。本当は、何らかの形で美術に関わりたいけれど、一年間を通してというのはとっても無理だ、でも何か一緒にやってみたいというような声を聞いたので、単発のボランティアというのも立ち上げました。これをプロジェクトボランティアと呼んでいます。本来、美術館の中で展覧会を始める前に「展示制作補助」をボランティアの人にしてもらうのは難しいものがあるんですが、水戸芸術館ではこの部分はボランティアの方たちに協働してお願い出来るなというのを、きちんと割り振って、時々やっていました。また、「ワークショップの補助」というのもあります。これは、展覧会に合わせて行うような単発のワークショップが時々あるので、その補助を行ってもらいます。それから、「ギャラリーライター」という試みも行いました。これは、年間を通してではないですが、ギャラリーライターを入れる展覧会を選定して、学芸員が書く解説とは別に、展覧会の中で選んだ作品について文章を書いてもらい、それをコピーしてギャラリーに置いてみなさんに読んでもらうというものです。それも、思い込みが強くて美学的な見知からガンガン書くというのではなく、現代美術に対してそれほど専門的な知識もなければ、あまり親しんでない人に対してどのように作品について語れるか、を意識して平易な文章を書いていただきました。学芸員の場合には、専門用語が日常になっているので、私たちとは別に、もう少し噛み砕いて書いてもらいます。もちろん、書きっぱなし、やりっぱなしではなく、書いて頂いたものを担当学芸員が読んで、ここをもう少しこうして下さいなどのやりとりを行って、最終的に一枚の紙にして作品の前に置きました。しかし、全部の作品に対してではなく、学芸員側から作品を提示する場合と、ライターさんが実際に書きたい作品を選ぶ場合と両方ありました。

#### 【水戸芸術館 高校生ウィーク】

これは、毎年2月、3月に行っている高校生ウィークという教育プログラムです。ウィークとありますが月刊なんです。大体1ヶ月で、全世界の高校生であ

れば誰でも無料で入れます。水戸芸術館では、ギャラリーの奥の方にワークショップルームというのがあって、ここ最近では、高校生ウィークのときはそこをカフェにしています。何でギャラリーのなかでカフェができるのかというと、横浜美術館のアトリエみたいな空間があって、水場もあるので、そのインテリアを教育担当のスタッフと参加している高校生と一緒にカフェにしてしまいます。ワークショップルームの中に設えられたカフェにある家具は、大体拾ってきました（笑）。廃物利用が大得意だったので、どこそこの店舗が閉まるというようなことがあると、みんなで取りに行ったりしていました。そういうことをしていると、「これって水戸芸術館が使ってくれるんじゃないかな？」という情報が入ってきたりもしました。（カフェに）ガラスのカウンターがあるんですけど、普通だったらとても手に入らない、宝石店のガラスケースです。その横にあるドアも、昭和の半ばに建てられた古い家を壊すというのでもらってきたものです。高校生ウィークのときには、高校生もボランティアとして参加し、カフェでお茶を無料で出し、展覧会を見終わったみなさんと気楽に交流が出来る場所になっています。また、ここでワークショップも行います。また、本棚を作って、展覧会関係の図書、もしくは水戸芸術館のカタログを設置して、好きに見てもらいます。鉢植えなども置いてとてもいい雰囲気になっています。

#### 【まとめ】

横浜美術館は水戸芸術館に比べたらずっと大きくて、ギャラリーの平米数は2倍、それからコレクションを入れたら4倍くらいになりますね。水戸芸術館はギャラリースペースだけで言うと、横浜美術館全体の約4分の1の1,000平米弱なので、それだけ活動がコンパクトではありますが、アートボランティアに関してはかなり初期から関わってきたと言えると思います。

では、「ボランティア」のまとめに入ります。まず自発的に何をやるか・何ができるかという、ボランティアをやる人の『自発性』ですね。それから、最近では有償のボランティアというのもあるので、必ずしも無償ではないですが、それに見合った等価の報償を得ないという『無償性』。例えば自分が一日働いたから一万円下さいというような賃金を求めない。それから『利他性』。これは、他の人のためにどれだけ役に立つかということですね。それから『先駆性』。これは、堅い組織では出来ないようなこと、もしくは組織の中では出来ないようなこと

をボランティアの人が先駆けてやるということが当てはまると思います。先程の水戸芸術館の例で言うと、公式ホームページが立ち上がる前にボランティアの人がホームページを作ってくれたというようなことですね。それから『補完性』。なかなかできないことをお互いの能力を出しあって補完すること。本来、文化施設できちんとスタッフを配置しなければいけないのに、それが出来ないためにボランティアにお願いするというのが、1990年代以降、ボランティアが社会的に認知された頃に多くなりました。でも私自身は、本来職員や社員を配置しなければいけないところをボランティアにお願いするというのは、間違っているのではないかと思います。ですが、今のところ補完性という意味ではかなり組織側が頼っているところがあると思います。それから、これはアートボランティアに関しては一番強いのではないかと思う『自己実現性』。アートボランティアと言うと、社会福祉的な要素が高いとは皆さんそれほど思っていないのではないかと思います。例えば医療ボランティアのように、病院に行って集中治療室に入っている子供のために何かするとか、災害地に赴いて救援活動をするとかは、社会貢献にすぐ結びつくと思うんですが、アートボランティアは大きな意味では社会貢献でも、無用の用みたいなどころがありますよね。すぐ必要とされている訳ではない。そういう意味では社会貢献というよりも自分の中にある何かを実現出来るための方法論という風に考えている人が多いと思います。もしくは、自己実現出来るということに満足度を得ている場合が多いかもしれません。

#### 「ボランティアの意識と責任」

自己実現をはかることができるかどうかということにもつながるんですが、医療、福祉の増進、災害救援、人権擁護と平和促進等の社会貢献に対して、美術界でのボランティアの意欲を維持するのは難しいかどうか。アート・ボランティアには、アートに接近する、アクセスする、ための回路を他の方よりも一早く提供できるというのがあると思います。水戸芸術館では沢山の人を対象にせず、ギャラリートーカーを20人前後に押さえていたのは、担当者が目配りできる数だったからなんです。エドューケーター2人が、20人の人達と綿密に連絡をしあって活動の充実度をはかっていたので、20人というのは個人対個人の関係性をきっちり維持できる数でした。

横浜トリエンナーレのように大きなイベントになりますと、20人なんて言うて  
るわけにもいかないの、大量の方に協力いただかないといけないですね。そ  
のなかで、リーダーをつくるとか、連絡の核になる人達を作っていくというのも  
出てくると思いますが、一番大事なのは、ボランティアに参加してくださる皆  
さん一人一人が、美術という、社会の中では非常に認知度が低いけれども、社  
会の中で不可欠なものを伝える、届けるという仲介者の意義と美術の存在意義  
を認知できるようにすることです。

※この後のまとめについては、映像がない為テープ起こしが出来ませんでした。